

後期ウィトゲンシュタインの反理論化傾向

榎野 沙央理

本稿は、『哲学探究』(1953)¹を中心とした後期哲学におけるL. ウィトゲンシュタインの反理論化傾向を正当化する試みである。そのために、『探究』109節における強い助言「どんな理論も立ててはならない」の射程を適当な範囲にまで拡張し、その範囲で、ウィトゲンシュタインが、どのような理論を、なぜ立ててはならないと考えていたかを検討する。

1 はじめに

ウィトゲンシュタインの『探究』は、哲学的病を治療することを目的として書かれたものである。

哲学者は問いをあつかう。病気を治療するように。(PU §255)

ウィトゲンシュタインの哲学的治療に関する議論は、G. ベイカー (2004)²の“Philosophical Investigations 122: Neglected Aspects”, *Wittgenstein's method: neglected aspects: essays on Wittgenstein*, Blackwell をはじめとして、ウィトゲンシュタインの方法論をめぐる議論の一区画を占めている³。

哲学的治療の内実をめぐる諸論点の中に、ウィトゲンシュタインの反理論化傾向とでも呼ぶべき態度をどのように定義するかという問題がある。ウィトゲンシュタインの反理論化傾向と呼ばれているものは、主に「私たちはどんな理論も立ててはならない」と明言する『探究』109節に依拠するものである。

ウィトゲンシュタインの反理論化傾向が体系的哲学を排除しないと考えるのは、P. ハッカー (1972, 1986) である。

¹ 本文で『哲学探究』を指示する場合は、『探究』と言い表す。ウィトゲンシュタインの遺稿から引用する際には、PU、TLP、VB、Zといった略号を用い、その後に節番号を示す。凡例は原稿の最後に記してある。

² 初出は1991年。

³ 例えば、*Wittgenstein at work: method in the Philosophical investigations*, edited by Ammereller, E. and Fischer, E., Routledge, 2004 を見よ。

ウィトゲンシュタインの後期の著には、表面上は体系的哲学の不合理性を示唆する発言が散見される。しかし体系的哲学の不合理性や不可能性を示すこれといった論証はどこにも提示されていないし、またそのような企てが望ましくないということや、無意味であるということの根拠もほとんど与えられていない。(1972 p. 140)

……意義の不確定性、概念の解放性、言語の流動性を正当化すると同時に、体系的でかつ包括的であることはできない、ということは決して明白なことではないからである。風景のスケッチのアルバム以上のものを生み出すことのウィトゲンシュタインの失敗を、完成した絵画を生み出そうと試みることの不可能性や無意味性のしるしであると理解する哲学者たちは、口を揃えてウィトゲンシュタインには多くのそれに関連した主張があると指摘している。哲学は理論でもなければ教説でもないという彼の主張は、体系的哲学を排除していると、強調される。……そのような解釈は、見当違いである。哲学は理論ではないという主張は、その主題に関するウィトゲンシュタインの最も初期の著作にまで遡る。そこで意図されている対比は、体系的哲学と非体系的哲学の対比（たとえばカントとニーチェの対比）ではなく、科学と哲学のそれである。(1972 p. 140, Cf. 1986 p. 176、下線強調は引用者)

ハッカーによれば、哲学が理論ではないというウィトゲンシュタインの発言は、科学と哲学の区別にあたるという。この解釈には、自然科学が現象の説明を因果関係の解明によって行う一方、哲学は言語がなぜそうあるのか（なぜ言葉は意味をもつのか、なぜ語は対象を言い表せるのか、なぜ人は初めて聞いた文を理解できるのか等々）、その理由を論理の様態の解明を通じて行うものである、という含意があると考えられる。ハッカーはこうした区別に従い、ウィトゲンシュタインが退けているのは自然科学を含む経験科学と哲学の混同であり、哲学理論ではないと論じる。

ハッカーの、反理論化傾向を自然科学との方法的混同にある程度限定する評価は、どの程度『探究』の核心を指摘し得ているのだろうか。私は、ハッカーの解釈のうち、経験科学と哲学の峻別に関しては、ウィトゲンシュタイン哲学のある重要な側面を指摘し得ていると考える。その理由は、ハッカーの区別に関連する以下の二点が、『探究』の試みを理解するにあたって重要だと考えられるからである。第一に、ある言葉について理解されうることは何であるかとい

う問題、すなわち文法的な事柄は、自然科学的な手法によっては明らかにされないと考えられる。というのも、自然科学的な手法から言語使用や言語の成立過程を考察すること——すなわち脳のブローカ野の反応を調べることや、人類の喉の構造の進化を調べることによって明らかにされることは、経験的事実として人間がどのように言語を使うかということや、言語はどのように成立したかという歴史的なことがらである。一方、言葉の文法は、これまでにどのように使われたかという事実だけではなく、言葉をどのように使おうかという理解可能性の問題に関わっており、自然科学的な手法によって明らかにすることができるとは異なっていると考えられる。第二に、自然科学的な手法によっては明らかにされないいくつかの事柄をウィトゲンシュタインが主題にしている。言葉が・言葉で何かを意味すること、思考すること、意図すること等々は、脳や身体組成を調査してみても、その内実を明らかにしたことはない事柄であると考えられる。というのも、神経生理学は、人が言葉を使っている時にどのような変化が脳内で生じているかを明らかにすることはできても、それが意味する・思考する・意図することを明らかにすることは考えにくいからである。意味する・思考する・意図するといった事柄を明らかにすることは、こうした言葉がどのように使われうるか、ということの検討を通じてはじめてないうるものであり、『探究』（厳密に言えば後期の哲学）のウィトゲンシュタインもこうした方法を採用していたように見える。

しかし、経験科学と哲学を区別するべきだからといって、ハッカーのように『探究』を包括的な体系として理論化可能なものとみなすことは、次のような三つの代償を払うことになってしまう。第一に、『探究』の試みを治療と称する眼目が、きわめてあいまいなものになってしまう。というのも、もし『探究』がある哲学者の誤りを指摘し、その代わりに正しい主張・理論を提示するものだとすれば、『探究』は他の伝統的な哲学とほとんど根本的な差異をもたないと考えられるからである。第二に、ハッカーは反理論化傾向と関連のある『探究』のいくつかの箇所についても同様に、ネガティブに評価せざるをえなくなる。例を挙げるなら、「哲学はそれ[言葉の実際の使い方]を基礎づけることもできない」(PU §124、[] 内補足は引用者)、「哲学は、あらゆることを提示するだけ。何も説明しないし、なにも推論しない」(PU §126)、「言葉の使い方に関するルールをシステムを、これまでにないやり方で洗練したり、完全なものにしたりするつもりはない」(PU §133) 等々がある。これらの節をネガティブに評価することは、ウィトゲンシュタインの試みを理解することの妨げになる可能

性がある。第三に、これは極めて基本的な点ではあるが、ウィトゲンシュタイン自身が、基礎づけることはせず、何も説明せず、既存のシステムを洗練しないと自称する試みについて、それを理論化の方向へ傾けて理解することは、どの程度正当な解釈といえるのかわからない。以上の三つの代償を払わなければならなくなるハッカーの解釈が、『探究』の方向性を完全に正しく位置づけていると認めることには、疑問の余地がある。

ハッカーのような代償を払うことは、できるだけ避けたいことである。それゆえ本稿は、反理論化傾向の射程を矮小化せず適切に把握することを試み、ハッカーの言う『探究』の理論化が本当に適切な方向性であると言えるのかについて、一つの判断材料を与えたい。そのためにまず第二章では、109節における「理論」を、ハッカーよりも広い意味で捉え、説明もどき・理論もどきを意味するものと定義する。さらに三章・四章では、理論もどきの一例と考えられる『断片』の443-444節をとりあげ、その理論もどきがどのようなものであるか、見かけと内実にあわせて検討する。そのうえで五章において、理論もどきと『論考』の構造的な類似点を指摘する。以上の検討によりある程度、109節の「理論」を理論もどきと定義することの内実を論述したうえで、六章では、理論もどきを立ててはならない理由を整理する。

2 『探究』109節における「理論」の射程

本稿が問題にしようとしている『探究』109節の基本的な内容の確認から始めよう。

適切にも私たちの考察は、科学的な考察であってはならなかった。「これこれのことが考えられる。私たちの先入見に反して」——たとえそれがどういう意味であっても——と聞かされても、私たちは興味をもてなかった。(思考がプネウマ[氣息・靈]のようなものとしてとらえられている)。だから私たちはどんな理論も立ててはならない。私たちの考察には仮説のようなものがあってはならない。すべての説明には退場してもらい、そのかわり記述だけに登場してもらおう。記述が光を、つまり目的を受けとるのは、哲学の問題からである。哲学の問題はもちろん経験的な問題ではない。哲学の問題は、私たちの言語の働きを理解することによって解決される。その働きを誤解しようとする衝動に逆らって、その働きが識別されることによって解決される

のだ。新しい経験をもちこむことによってではなく、ずっと前から知られていたことを編成することによって、問題が解決されるのだ。哲学とは、私たちの悟性に魔法がかけられていることにたいして、私たちの言語を使って戦うことである。(PU §109、圏点強調は原文、下線強調は引用者、[]内補足は翻訳者)

109 節のポイントは、三点ある。第一に、私たちの考察の本性が、科学的なものであってはならず、理論や仮説・説明が許されてはならない。第二に、理論や仮説・説明の代わりに記述がなされる。第三に、哲学の問題は、言語の働きを誤解しようとする衝動に逆らって、言語の働きを理解することによって解決される。本稿が扱おうとするのは、第一のポイントである。すなわち、私たちの考察の本性が、科学的なものであってはならず、理論や仮説が許されてはならないのはなぜなのだろうか。ここで考えられている理論とは、どのようなものなのだろうか。⁴

「どんな理論も立ててはならない」という強い助言が、『探究』の治療に役立てられるものである以上、理論の射程には、その治療対象が含まれていると考えるのが自然である。『探究』の主要な治療対象としてすぐさま挙げられるべきであるのは、ウィトゲンシュタイン自身の過去の著作『論理哲学論考』⁵である。このことから、理論ということで『論考』が示唆されていると考えることもできそうに思われる。しかし、ハッカーが指摘するように、109 節は『論考』における哲学と自然科学との峻別 (TLP §4.111) を示唆しているようにも見えなくはない。この相容れない二つの解釈を、どのように取り扱うべきだろうか。

ここで、次のようなある穏当な解釈を提示しよう。確かに、『論考』が示唆する通り、哲学はある特定の現象や出来事を扱うのではなく、論理的あるいは文法的な事柄とそこから発生しうる錯誤を取り扱う。この意味で、『論考』と『探究』はともに、経験的な問題を取り扱うものではないと言っても誤りではない。だが、両者は著しく異なる方向性をもつ。『論考』が、言語の一般的な記述形式を提示することによって錯誤を解消しようとするのに対し、『探究』においては、言葉のありようが誤って把握されてしまいそうになる場面に着目し、その誤った把握の仕方に逆らって言葉のありようを適切に理解することで問題が解決さ

⁴ 『探究』109 節においてウィトゲンシュタインが、「仮説」「理論」「説明」を置換可能なもののように取り扱っていることから、本稿でもこれらの語を置換可能なものとして取り扱う。

⁵ 以下『論考』とする。

れる。そして、『論考』が『探究』の主要な治療対象だということは、まさに「その働きを誤解しようとする衝動」(PU §109) が、『論考』に多分に含まれるということだと理解できる。

上記の説明が基本的に正しく、『論考』が 109 節における「理論」の射程に含まれるということが認められるならば、ハッカーの区別はそれほど完全なものとはいえなくなる。もちろんハッカーの経験科学と哲学を峻別する解釈は誤りだとまでは言えないが、ハッカーの解釈にとどまるならば、『論考』がなぜ治療対象とされたのかについて、上記の説明とは異なる説得的な説明が与えられる必要があるだろう。

本稿では、中心的な治療対象である『論考』が「理論」の射程に含まれるという立場をとる。そして「理論」の拡張された射程を適切に表現するため、これを「説明もどき pseudo-Erklärungen」(VB p. 527) あるいは「理論もどき」と言い換えたい。「説明もどき」は、フロイトを批判する言い回しである。

フロイトは、すばらしい説明もどき（なにしろ機知に富んだ説明なのだ）によって、ひどいことをしでかした。

（どんな頓馬でもこの像を手もとにすれば、この像の助けを使って病気の現象を「説明」しようとするのである。）(VB p. 527)

次章以降では、この説明もどきあるいは理論もどきの見かけと内実について検討する。

3 『断片』443-444 節における理論もどきの特徴

本章では、『探究』と多くの記述を共有する『断片』のある例を検討し、説明もどき・理論もどきがどのようなものであるのかを考察する。『断片』443 節には、奇妙な主張を行う哲学者が登場する。この 443 節の哲学者の主張を、説明もどき・理論もどきの一つの例だと考えてみよう。

ある人々には、いつも、指で円を空中に描いて対象を囲むような仕方で、諸々の対象を指示する習慣があるとせよ。その場合、ある哲学者が毎回、ものの回りに円を描く動作を繰り返しながら、「すべてのものは円形 *kreisrund* である。というのは、テーブルもこのように見え、ストーブもこのように見え、

ランプもこのように見えるから」と語るのを想像することができよう。(Z §443)

ここで哲学者はどんな主張をしているのだろうか。ここで哲学者の考察の対象となった人々は、物体を囲むように指でぐるぐると円を描いて対象を指示する慣習⁶をもっている。この人たちは例えば、指でぐるぐると円を描きながら、「もうこのストーブしまったら?」とか、「このテーブルを使ってください」とか言う。円を描く指の運動は「いつも」(Z §443) 行なわれていることから、指の運動は特定の個体を指示するためには役立たず、むしろある物体について言及するための振る舞いの一部、何事かに言及する形式の一部となっていることがわかる。こうした言語使用を行う人々のあいだで哲学者は、指でぐるぐると円を描く身振りを行いつつ、「すべてのものは円形である。というのは、テーブルもこのように見え、ストーブもこのように見え、ランプもこのように見えるから」(Z §443) と主張する。哲学者の主張は、対象を指示する際の指で円を描くという慣習的振る舞いのうち、構成要素の円だけを抽象し、「すべてのものは円形である」、と主張するものである。

ウィトゲンシュタインはこうした哲学者の主張について、直後の節で次のように分析する。

ここでわれわれは、一つの理論をもつ。すなわち命題、つまり言語についての<力学的>理論 *eine >dynamische< Theorie**をもつ。しかしそれは、われわれには、理論の体をして現われてはこない。というのも、ある特定の、直観的に明白な場合を眺めて、「これは、ものがそもそもいかにあるかということを示しており、この場合があらゆる場合の原型である」というのがそのような理論の特性なのであり、——われわれは「もちろん、そうでなければならぬ」と言い、それで満足するのだから。われわれは自分たちに**分明な**、ある表現形式に到達する。しかしそれは、あたかもわれわれが今、表面の**下に横たわっている**、何かあるものを見つけ出したといった具合である。……

⁶ 慣習ということで筆者が考えているものは、ある言語使用、すなわち発声や身ぶりが、ある集団の中で営まれている生活の形式の一部である、ということである。ある言語使用が生活形式の一部であるとは、何かを話したりジェスチャーしたりすることが、コミュニケーションの手段として複数の人によって共有され、教育によって受け継がれ、いわばある民族の人たちの生活と一体となっている、ということである。

*フロイトは夢の〈力学的〉理論⁷について語っている。

(Z §444、圏点強調は原文)

ウィトゲンシュタインによれば、443 節の哲学者の主張は、「〈力学的〉理論」(Z §444) であり、その〈力学的〉理論は理論の体をして現われてこないという。理論の体裁をしていない哲学者の主張がここで一つの理論（しかも括弧で強調された〈力学的〉理論）と考えられるということは、いったいどのような意味でそうなのだろうか。

まず哲学者の「すべてのものは円形である」(Z §443) という奇妙な主張が、ある意味で理論と呼ばれる理由は、次のようなものだと考えられる。まず、哲学者の主張は、何らかの言語使用について言及しているのでもなければ、個別の物体について言及しているわけでもない。哲学者は、指で円を描くという振る舞いから抽象された円を、すべてのものの本質として提示する。哲学者のこうした提示は、あたかも、言語使用と物体に共通する本質的な何ものかを提示するように見える。すなわち言語使用から抽象された円形は、すべてのものの背後にある「原型」(Z §444) として提示される。だから哲学者の「すべてのものは円形である」という主張は、一見すると言語について何かを明らかにしてなさそうに見えても、それが本質的なものとして提示されると信じる人にとっては、すべての運動の原理を説明する運動の法則と同じように、言語の背後で働いているものの本性を明らかにしているように見えることになる。例えば、当の慣習のもとにある人が指で円を描きながら「このテーブルを使います」と発言するとき、この発言によって目の前のテーブルについて言及することが

⁷ ウィトゲンシュタインがここでフロイトを示唆した理由は、J. ブーヴレス (1991) の指摘が参考になる。ブーヴレスによればウィトゲンシュタインは、普遍主義と呼ぶべき偏見、すなわち事実の一部を説明するに過ぎない説明が事実の全体を説明できるにちがいないという偏見に対しフロイトを批判しているという (邦訳 p. 189)。ただし『断片』443 節の哲学者の主張の問題点は、過度の一般化にのみあるのではなく、一般化とともに特殊な抽象化がなされている点にもある。というのも哲学者の主張は、すべてのものに通底すると想定される円の形だけを抽象するものであり、これは実のところ事実の一部さえ説明しないものであるからである。

ちなみに、大修館書店の邦訳 (ウィトゲンシュタイン全集 9 巻『确实性の問題／断片』) では、444 節の註を編集者の註としているが、ゾーアカンパ社の全集では、この註が編集者の註であることを示す「Hrsg. (=Herausgeber)」という印がついていない。編集者以外に『断片』に手を加える可能性があるのは、ウィトゲンシュタイン自身か、『断片』を初めて整理した P. ギーチである。本稿では、編集者の序にある「またそのボックス (=『断片』の遺稿がしまわれていた場所) には、明らかに他の諸断片で取り扱われた特定のテーマについての註である、若干の手書きの断片も存在する。」(Z p. 261) という言葉に則って、ウィトゲンシュタイン自身による註と解釈した。

できるのは、言及されるテーブルの背後に、円形という原型が横たわっており、その円形を振る舞いが写し取っているからこそ、目の前のテーブルについて言及することが可能になるのである、といった具合である。もしこのように考えれば、哲学者の主張は、表面的には説明になっていないように見えても、それは原型を追求するという探究の本質からして当然であり、より根源的なしかたで言語の本性を明らかにする理論なのだと思える可能性もあるだろう。^{8,9}

⁸ 『断片』444 節には、『論考』を思い起こさせる二つの言葉——「<力学的>理論」と「原型」がある。まず<力学的>理論 eine >dynamische< Theorie ということで思い出されるのは、『論考』における哲学とニュートン力学 die Newtonsche Mechanik の強い類比である。

たとえばニュートン力学は世界記述に統一的な形式を与えている。…… (TLP §6.341)

かくして、われわれはいまや、論理学と力学の相互の位置関係を理解する。…… (TLP §6.342)

……ニュートン力学によって世界が記述されうるのは、世界について何事も語りはしない。他方、ニュートン力学によって世界が事実そうあるとおりに記述されうるといふこと、このことは世界について語るものとなっている。(このことを私は既に長い間感じてきた。)
…… (NB pp. 35-6, Cf. TLP §6.342)

力学とは、世界記述に必要とされる真な命題のすべてを、一つの計画に従って構成しようとする試みである。(TLP §6.343、圏点強調は原文)

力学による世界記述がつねに完全に一般的なものであることを忘れてはならない。(TLP §6.3432)

上記の諸節は、『論考』とニュートン力学が似ていたということを正当化するものとは考えられないが、ともかく『論考』のウィトゲンシュタインが、ニュートン力学と自身のプログラムを類比的に考えていたことは明らかである。このことから、『断片』444 節における<力学的>理論という表現は、443 節における哲学者の主張「すべてのものは円形である」が、『論考』的な考え方を反映したものだということを示唆すると考えてもそれほどおかしくはない。

さらに、『断片』444 節における「原型」という語によって思い出されるのは、『論考』において登場するものと原語のスペルもまったく同じ「原型 Urbild」という概念である。

ある命題の一つの構成要素を変項に変えたとする。そのとき、そうしてできた可変的命題の値となる命題全体の集合が存在する。……意味が恣意的に決められるそうした記号をすべて変項にしてしまっても、それでも依然としてその値となる命題の集合が一つ存在する。……この命題の集合は、論理形式——論理的原型——に対応する。(TLP §3.315)

原型とは野矢 (2003) の訳注によれば次のようなものである。

たとえば「すべての猫はあくびをする」は、特定の猫に言及しているのではなく、「猫であるような x」を取り出すものである。この「猫であるような——」が、ここで原型と呼ばれるものであると思われる。(p. 186)

以上のような、『論考』の「原型」の特性を踏まえるならば、『断片』443 節における哲学者の「すべてのものは円形である」という主張は、どのようなものとして理解されるだろうか。まず「すべてのものは円形である」という主張は、野矢の訳注に従うことで「円形であるような——」という原型に置きかえられる。原型「円形であるような——」からは、例え

こうした哲学者の主張は、ウィトゲンシュタインの指摘通り、理論の体裁をしてはいない。443 節の哲学者は、原型としての円形がどの程度一般的に言語使用を説明するかに気を配るよりも、むしろ、原型というもののあり方を、円形が満足するか否かに注意を向けているように見える。またその哲学者に同業者がいたとしても、その同業者が、原型という概念を吟味するため、実際の言語使用を詳細に調査することはないだろう。むしろ他の哲学者は、円形として提示された原型が、言語の根底にある本質的なものとして満足のいく表現であるか否かを見てとる。例えば、他の哲学者は「すべてのものは円形だ、と言うのは正しい。物体を指示する際に円を描くことは明らかで、物体には円形という原型があらかじめ背後に備わっているはずだと考えられるから」というふうに、はじめから抽象化した仕方と言語使用を考えるだろう。哲学者は、物理学者が運動の法則について、それが現象を説明あるいは予測しうるかを検討するための実験・観察を行なうようには、自身の理論を検証しないのである。

こうした事情からして、『断片』443-444 節を通じて示される〈力学的〉理論は、**見た目において理論とみなせるようなものではない**ことがわかる。

ば槇野家のダイニングにあるテーブルやストーブ、電球といった「円形であるような x 」が得られることになる。そのうえで、槇野家のダイニングでテーブルの回りに円を描きつつ、「このテーブルは茶色い」と言うとしよう。その時、可能な事態「このテーブルは茶色い」「このテーブルは白い」「このテーブルは赤い」のうち、「このテーブルは茶色い」という事実だけが成立しており、「このテーブルは白い」「このテーブルは赤い」は成立していないということになる。こうした言明が可能になるのは、世界記述の統一的形式の一部である原型が指定されるからであり、原型がなければ、そもそも「円形であるような x 」を取り出すさえできないと、哲学者にとっては考えられることになるだろう。

『断片』と『論考』それぞれの「原型」が完全に同じ意味で使われているということは疑わしいため、本文では取り上げなかったが、どちらにせよ奇妙な理論もどきになっていることに変わりはない。

⁹（この註は一つ前の註の補足である。）『論考』6.341 節の続きは以下の通りである。

たとえばニュートン力学は世界記述に統一的な形式を与えている。不規則な黒い模様のある白い平面を想像してみたい。そこで次のような方法を与えるのである。その平面を十分に細かい正方形の網の目で覆い、網の目ごとにそこが白いか黒いかを言う。こうすれば、模様がどのようであろうとも、任意の精確さでそれを記述することができる。このやり方で、私は、その平面の記述に統一的な形式を与えたことになるだろう。三角の網目でも六角の網目でも模様を記述することはできるから、正方形を用いたこの形式はその点では恣意的である。……ここで、異なる網の目は異なる世界記述の体系に対応している。力学は、すべての世界記述命題が所定のいくつかの命題——力学の定理——から所定の仕方形成されねばならないと主張し、そう主張することによって、世界記述の形式を定めるのである。……（TLP §6.341）

この節で十分に細かい正方形（あるいは三角形や六角）の網の目が意味するものは、『論考』の道具立てに置きかえれば、「要素命題」（TLP §4.21）であり、黒と白があらわす模様は「要素命題の真理可能性との一致・不一致を表現」する「命題」（TLP §4.4）を意味すると考えられる。

4 理論もどきの奇妙な内実

『断片』443 節における哲学者の主張は、それが世界と言語の共有する本質的なものだと思える人にとっては理論にみえるかもしれないが、実際の言語使用との擦り合わせの手続きをほとんど必要としておらず、理論の体裁をほとんどなしていない。このことから、443 節の哲学者は、実際の言語使用のありようを問題にしてなどいないのではないかと、という疑惑が生じることは不可避である。

この疑惑に対し、哲学者の主張が、いかなる意味でも実際の言語使用のありようを問題にしないという考えは誤りだと思われるかもしれない。というのも、哲学者が理論形成を行うきっかけは、人々の振る舞いを観察することといった、何か実際の言語使用にあったかもしれないからである。だが、哲学者が提示した理論は、哲学者以外の人にとっては、言語のありようを明らかにするために役立つものとはいえない。というのも、「この人々は何らかの対象を指示する際に、常に円形を描く」や、「この人々にとって指で円を描くことは、ある対象を指示するためには欠かせない振る舞いである」という主張ならまだしも、「すべてのものは円形である」という主張は、いったいどんな言語のありようを明らかにするものであるのか、ほとんど何もわからないからである。指で円を描く動作はある人々の生活の中で一定の役割を果たすものであって、そこから円形だけを抽象したとしても、何事かを明らかにしたことはない。¹⁰ 誰でも円を描く指の動きを個々の言語使用において見てとることができるということは、「すべてのものは円形である」という主張を、誰もが理解し受け入れてしかるべきであるということを保証しはしない。

結局「原型」は、哲学者以外の人間にとっては、ほとんど価値のないものとみなされると言ってもよいものである。それでは、原型は、哲学者にとってどのような意義があるのだろうか。『断片』444 節の続きを見てみよう。

¹⁰ 「原型」が、役に立たない説明であるという点についてももう少し詳しく述べるならば次のようになる。そもそもある人々にとって対象を指示する際に指で円を描く動作は一つの慣習である。指で円を描く動作はその人たちの生活の中で一定の役割を果たすものであり、そこから円形だけを抽象して取り出しても何にもならない。つまりこの慣習がどのようなものであるかを知らせるためには、「すべてのものは円形である」と述べることは役に立たないのである。慣習の内実を知らせるのは、例えば、具体的にどのような慣習であるかの説明を求められている場合は実演によって、どのようにしてこの慣習が成立したのかの説明が求められている場合はその歴史的経緯を語ることによってである。哲学者の主張は、どのような慣習であるかを知りたい人にとっても、慣習の成立を知りたい人にとっても役に立たない。

ある明白な場合を一般化しようとする傾向は、論理学において、確固とした権利をもっているように見える。ここにおいては、「ある一つの命題が像であるならば、どの命題も像でなければならない。なぜならそれらはすべて同質なのだから」という推論が完全に正当化されるように見える。というのは、われわれは自分たちの探究における崇高なもの、本質的なものは、一つの普遍的な本質を把握することにあるという錯覚に陥っているからである。(Z §444、圏点強調は原文、下線強調は引用者)

ウィトゲンシュタインは、論理学者¹¹が、ある錯覚に陥っていると指摘する。先の哲学者がなしたように、すべての場合を同質なもの（円形）とみなす過度の一般化傾向は、言語の本質（原型）を把握せねばならぬという信念を抱いている論理学者・哲学者にとっては当然の方法であるかのように思える。だがこの方法が当然の権利をもっているように思えるのは、言語の本質たる何ものかが存在すると信じられている場合に限られる。言語の本質など要請されないところでは、過度の一般化も正当化されないと考えられる。それゆえ原型は、それが措定されることによって、哲学者の過度の一般化を正当化するために役立てられるものであるといえる。ここでは、哲学者が措定した原型が、哲学者の活動を正当化するという意義づけの循環が見られる。

いまここで意義づけの循環については非難せず、あくまで哲学者と同じ立場に立って原型の意義を考えてみよう。ウィトゲンシュタインによれば、かの哲学者が提示する原型としての円形は、「自分たちに分明な、ある表現形式」(Z §444)である。つまり原型として提示された円形は、(そのようなものが根底にあると考える人にとっては)ある満足のいく表現であることになる。ここで問題になるのは、原型が(哲学者たちにとって)満足のいく表現であるということが、哲学者自身にとって、原型という概念をどの程度内実あるものとしているのか(どの程度使い道のある概念なのか)、ということである。

この問題を、哲学者の活動が、どの程度独立した営みと呼びうると考えられるか、という問題に置き換えて考えてみよう。原型という概念を使用する日本の哲学者たちがいるとすれば、彼らの振る舞いと、そのような振る舞いを行わない日本人(例えば主婦やサラリーマン)の振る舞いは、どの程度似ており、

¹¹ 前後の節の関係からして「哲学者」(Z §443)と同じような意味合いで使われていると考えられる。

どの程度異なっているのだろうか。両者の類似点は、非常に多い。両者とも、同じ文化圏に属している、つまり起床してパンを食べたり新聞を読んだり電車に乗ったりしている。つまり、原型という概念を使用することは、両者の生活形態にほとんど差異をもたらさない。一方、両者の振る舞いには差異が存在する。その差異とはまさに、原型をはじめとする専門用語を使用して話をするか否か、という点に生じる。このように考えてみると、哲学者とそうでない人たちの営みは、そのほとんどが共有されており、哲学者が独自の文化圏——婚姻や生死や食生活において独自の営みをもつとは考えられない。哲学者の活動は、哲学をしない日本人の営みから独立した営みというよりも、多くの日本人の営みの中でも、ニッチの活動を行うグループと呼ぶ方が、より適切であるだろう。

もし哲学者が十分に独自の営みをもつとは考えられず、その他の人たちと同じような生活を送っていると認められるならば、たとえ哲学者が原型という表現を使うことに満足を感じるとしても、その満足は、哲学者にとってさえも、例えば感謝の気持ちを述べる際に「ありがとう」という言葉を使うことによって得られる満足や、満員電車を降りる際に「降ります！」と叫ぶことによって得られる満足とは異なっている。感謝の言葉を使うことの満足は、他者に感謝の念を伝えるということと切り離せない。「降ります！」と叫ぶことによって得られる満足は、無事に目的地で下車することと切り離せない。一方、原型はどうか。その言葉を使うことと切り離せないような、何らかの生活形式をもっているとは考えにくい。(原型という言葉を使って他者を罵倒したり、慰めたり、呼び寄せたりするとは思われない。) 原型は、哲学者にとっても生活の中に組み込まれて一定の役割を果たす言葉と同じような存在意義をもつとは考えにくいのである。

以上の考察をまとめるならば、理論もどきの**内実**の奇妙さは次のような点にある。原型として提示される円形は、特殊な信念を抱いている哲学者以外の人にとっては、言語使用を明らかにするために役立つものとは考えられず、それどころか実際の言語使用をほとんど問題にしていなとさえ考えられる。原型は、とある活動をなす哲学者たち、すなわち言語の根底にある本質的で普遍的なものを把握しようとする哲学者たちにとっては、満足を与える表現形式ではある。だが哲学者たちの活動は、まさにその活動を除いては、彼らの振る舞いが独自の文化圏を形成するというほど、他の人たちとは異なっていない。結局、原型は哲学者以外の人にとって言語のありようを明らかにするために役立つ

たないばかりか、哲学者にとっても、生活において役立てられ営みに根をもつ様々な言葉と同じようには、意義を認められないものである。

5 理論もどきと『論考』の構造的類似性

これまで三章と四章で行った理論もどきの見かけと内実の奇妙さには、ある特徴が見られた。その特徴とは、理論もどきは理論の見かけをしておらず実際の言語使用を問題にしていないということ、そして、ニッチの活動においてのみ特殊な意義があると考えられるものであるということである。理論もどきに『論考』が含まれるとすれば、こうした特徴は、『論考』のどのような考え方に関係しているのだろうか。『探究』109節周辺で語られる次のような『論考』の思想を検討してみよう。

思考は後光につつまれている。——思考の本質である論理があらわしているのは、秩序だ。しかも、世界のア・プリオリな秩序である。つまり、世界と思考に共通しているに違いない、可能性の秩序である。ところでその秩序は、きわめて単純でなければならないらしい。すべての経験に先行して、どんな経験にも貫通していなければならない。その秩序じたいには、経験にまつわる濁りや不確かさがくっついてはならない。——むしろその秩序は、きわめて純粋な結晶でなければならない。しかしその結晶は、抽象としてあらわれるのではなく、具体的なものとして、いや、もっとも具体的なものとして、いわば、もっとも硬質なものとしてあらわれるのだ。(『論理哲学論考』5.5563) …… (PU §97、圏点強調は原文)

ここでは、『論考』が「要請し」(TLP §6.1223) 提示する、世界のア・プリオリな秩序としての論理の特性が語られている。論理は、『探究』のウィトゲンシュタインが示唆する『論考』の5.5563節によれば、「もっとも単純なもの」であり「欠けるところのない真理そのもの」である。また、「世界と思考に共通しているに違いない、可能性の秩序」(PU §97) とは、『論考』2.012節や2.0121節を中心とした論理の本性(「あるものがある事態のうちに現われうる」(TLP §2.012、圏点強調は原文) ということを可能にする特性) に関するコメントである。さらに、「その秩序は、きわめて単純でなければならない」(PU §97) は、「論理の問題の解決は単純であらねばならない。……「単純さは真理の印」

(TLP §5.4541) という論理の単純さに関係している。加えて、「すべての経験に先行して、どんな経験にも貫通していなければならない」(PU §97) は、「論理は何かがこのようにあるといういかなる経験よりも前にある」(TLP §5.552、圏点強調は原文)、「論理は超越論的である」(TLP §6.13) という論理の先験性に関係している。

『論考』の著者からすれば、世界のア・プリアリな秩序をあらわす論理は、言語使用を有意味にする超越論的な条件である。この論理を追求することに意義があるとすれば、われわれが現実が生じている事実のみではなく、起こりうる事態についても語りうるためには、論理形式がなければならないのだ、と考える場合に限られる。だが、言語が可能的な事態について語るができる理由を明らかにせねばならないという『論考』的見地から離れ、言語がいかなる基礎づけもなしに自律的に働いているという『探究』的な境地に立ってみれば、世界のア・プリアリな秩序というものの内実が、きわめて奇妙なものに見えてくるだろう。

世界のア・プリアリな秩序の奇妙さを、『探究』的な境地から、二つの論点に分けて指摘していこう。第一に、世界のア・プリアリな秩序として提示されたものが、『論考』著者の思惑に反して、言語使用を明らかにしているとは考えにくい。例えば、われわれが反実仮想的な事態を考える場合には、過去と未来についての思いなし(願望・希望・後悔・反省)やフィクショナルな想定(小説・映画・舞台)などが挙げられる。こうした場合の言語使用がどんなものであるかを明らかにしたければ、具体的な言語使用を考えてみて、その言葉の使い方にどんな特徴があるかを検討していくほかない。こうした手法により、現在形・過去形・未来形の使い方の興味深い差異が指摘されるとすれば、それは言語使用を明らかにしたことになると考えられる。例えば、「私は富士山に登りたい」「私は富士山に登りたかった」「私は富士山に登るつもりだ」が、それぞれ特徴的で異なった振る舞いや状況に取り巻かれるということが具体的に指摘されるならば、その指摘は言語使用のありかたを興味深い仕方で認識することに貢献してくれるだろう。だが、例えば「われわれの日常言語のすべての命題は、実際、そのあるがままで、論理的に完全に秩序づけられている」(TLP §5.5563)と言われたとしても、いったいどんなことが明らかにされるのかわからない。あたかも言語使用の背後にもぐりこんだような提示をされても、『論考』的な要請の内部に留まらない限り、それが何の解明になっているのかは不明なのである。

ここにおいて、『断片』の理論もどきのみかけに関わる特徴——現実の言語使用を問題にしてはいないということが、『論考』の世界のア・プリオリな秩序という思想にも当てはまる。

第二に、ア・プリオリで純粋な秩序は、その秩序を使っていったい何をやればいいのかわからないものである。というのも、その秩序は、われわれが普段接しているもの（椅子やテーブル）と同じような仕方では存在しているとはいえないからである。その秩序はすべての経験に先行しているとされ、例えば「ここに勉強机がある」と語ることができるための条件と考えられている。そのような可能性の秩序は、椅子やテーブルと同じ仕方では存在するといえるようなものではない。仮にア・プリオリで純粋な秩序が存在するとすれば、そのように要請されたものであるという限りにおいて存在するといえるかもしれない。だがあるものを要請し想定することと、あるものが存在するということは別の事柄である。「将来生まれてくる私の子どもは、きっと女の子だ」と想定したところで、その子どもが存在することにはならない。この指摘に対し、あるものが存在しているかどうかはわからなくても、あるものが存在するという想定で振舞うことはできる、と反論されるかもしれない。もちろん、先の例で言えば、その子どもが存在するという想定のもとに振舞うことは、現に自分あるいはパートナーが妊娠しているといった、ある特定の場合には十分に想像可能である。だが、配偶者も恋人もいない人にとって同じような振る舞いが十分に想像可能であるとはいえない。つまり、すべての仮想的な存在が、いつでもわれわれの言語使用との関係を十分に備えているわけではない。それゆえ、仮想的な存在がわれわれの生活においてある役割を果たすことがありうる、ということは、ア・プリオリな秩序という想定がただちに、われわれの生活においてある役割を果たしうる、ということを保証しはしない。ア・プリオリで純粋な秩序は、用途不明の仮想的存在でしかない。

ア・プリオリで純粋な秩序は、それを想定することによってどのような振る舞いが可能であるかが十分に想像されないかぎり、この秩序を想定することは哲学者の要求に応えるという眼目以外に主要な眼目をもたなくなってしまう。

実際に使われている言語をよくながめればながめるほど、実際の言語と私たちの要求は激しく対立するようになる。(論理が結晶のように純粋である、ということは私の研究の結果ではなく、要求だったのだ。) 対立は耐えがたくなり、要求はむなしなものになろうとしている。——私たちはアイスバーンに

入ってしまった。摩擦がないので、ある意味で条件は理想的だが、しかしだからこそ歩くことができない。私たちは歩きたい。そのためには摩擦が必要だ。ざらざらした大地に戻ろう！（PU §107、圏点強調は原文、下線強調は引用者）

ここにおいて、『断片』の理論もどきの内実に関わる特徴——ニッチの活動においてのみ特殊な意義があると考えられるものであるということが、『論考』の世界のア・プリオリな秩序という思想にも該当している。

6 なぜ理論もどきを立ててはならないのか

以上の考察によって、理論もどきの見かけと内実、また、理論もどきの特徴が『論考』にも見られることをある程度説明することができただろう。ところでこうした考察は、主に**どのような理論が立ててはならないとされたかの**か、という問題を中心に展開されてきた。それゆえ**なぜ理論が立てられてはならないのか**についてはまだあまり整理されていない。読者の理解という観点からすれば、理論化の内実の奇妙さからして、もうすでに理論が立てられてはならない理由も明らかであるかもしれない。だが、反理論化傾向を明確化するという本稿の目的のため、後者の問いに対する回答をいま改めて整理してみよう。

理論を立ててはならない理由として、理論化の奇妙さについて、三点に分けて再確認しよう。第一に、理論化は、用途不明の仮想的存在物である「世界のア・プリオリな秩序」（PU §97）の措定を、必然的に伴ってしまう。もちろん、用途のわからない仮想的存在を考えてみて、その仮想的存在の使い道を後から考える、ということは可能であるし、われわれが普段そうした振る舞いをしていても不思議ではない。だがこの場合に問題がないと考えられるのは、仮想的存在の使い道がそれ自体を目的とした要請・措定以外に何かしら考案されうる、あるいは、実際にその使い道によって仮想的存在が生活において意義をもつようになる場合である。世界のア・プリオリな秩序にそのような使い道を、具体的に考えることはできるのだろうか。その見通しは、きわめて暗いように思われる。¹²

¹² これに対し、仮に世界のア・プリオリな秩序が恒常的に用途不明の仮想的存在物であり続けるとしても、このこと自体は悪いことではない、と思われるかもしれない。確かに、妄想を抱くことが必ずしも悪いことではないように、世界のア・プリオリな秩序を考えることも

第二に、理論もどきは、実際の言語使用のありかたを問題にしているとは考えられない。実際の言語使用のありかたを問題にする、とはどういうことだろうか。さまざまな基準が考えられるが、大まかな方向性としては、日常的な言語使用に基づいて、その多様性をできる限り損なわない仕方で、ある重要な特性を明らかにすることができれば、言語使用をまともにとりあつたものと言えるだろう。このような方向性と対照したとき、哲学者の「すべてのものは円形である」(Z §443) という主張は、いったいどんな言語使用のありようを明らかにするものであるのか、ほとんど何もわからない。¹³

第三に、理論化は過度の一般化を伴う。哲学者の「すべてのものは円形である」(Z §443) という主張は、人々の慣習の振る舞いから円形という特徴だけを抽出しそれをすべてのものの本質として提示するものであるが、ここには過度の、しかもかなり特殊な一般化がみられる。ここで特殊と言われるのは、「すべての言語使用は程度の差はあれども円形を描くことと関係して成り立つ」という主張ならば、ただ単に過度の一般化といえるが、「すべてのものは円形である」という主張は、もはや言語使用についての一般化された説明ではなく、言語使用の背後にある本質的なもの（しかもこれ自体措定されたもの）の表現になってしまっており、ただ個別の言語使用を一般化した主張とは質が異なるからである。

こうした理論化の内実の奇妙さを示す三つの問題点¹⁴は、理論化の奇妙さを

悪いこととはいいがたい。だが哲学者は、世界のア・プリオリな秩序を妄想だとは考えないだろう。それどころか、世界のア・プリオリな秩序を構築することが必要であり、それをせねばならぬと考えていると推測される。だから、確かに用途不明の仮想的存在物を構築することそのものが悪いことだということは難しいけれども、ポジティブなことだとは言えないようなことに労力を使おうとすることを、異常なことだということは可能である。

¹³ これに対し、実際の言語使用のありかたをまともに取り扱うことは、哲学者にとってそれほど重要ではないと思われるかもしれない。すなわち、言語の背後にある普遍的な本質を把握することが重要なのであるから、実際の言語使用からある程度遊離した主張を行うこともやむを得ないのである、と。だがこうした反論には、用途不明の仮想的存在物である「世界のア・プリオリな秩序」(PU §97) の措定の場合と同じ疑問が提起されるのである。

¹⁴ 前章までの間に取り扱うことができなかつた理論化の問題点を、ここで追加しておきたい。理論化には、言葉が奇妙な仕方を取り扱わざるをえないという問題点がある。例えば『論考』の著者が、論理があらわしている秩序が純粋なものであるという要求に従って、その内実を構成していこうとすれば、ある困難に陥る。

私たちは勘違いしている。私たちの探究が特別で、深いもので、重要であるのは、言語のたとえようもない本質をとらえようとしているからだ、などと勘違いしているのである。そういう本質というのは、文、単語、推論、真理、経験などの概念のあいだにある秩序のことだが、そういう秩序は、——いわば——超＝概念のあいだにある超＝秩序にすぎないのだ。ところが「言語」や「経験」や「世界」という言葉が使われるとすれば、「テーブル」や「ランプ」や「ドア」とおなじように、高級でない使い方をする必要がある。(PU §97、圏点強調は原文)

様々な方向から提示するものとして、ウィトゲンシュタインが 109 節においてなぜ理論を立ててはならないと強く助言したのかについてある程度の理由になると考えられる。これらが理由であると認められるならば、ウィトゲンシュタインの反理論化傾向とは、「理論を立てようとする、すなわち言語使用の背後にあって言葉が何かを指示したり意味したりすることを可能にする普遍的で本質的な何ものかを措定したり、その何ものかを、一つの理論として構築したりすることは、さまざまな不自然な設定を辞さないことであるがゆえに、基本的に避けられるべきである」、ということになる。このテーゼを、穏当な反理論化傾向のそれとみなしてよいだろう。

これに対し、穏当な反理論化傾向のテーゼが、「どんな理論も立ててはならない」(PU §109) という強い語気を十分に説明するものであるかどうか、疑問を抱く人もいるかもしれない。その人は、穏当なテーゼに基づくならば、せいぜい「どんな理論も立てないほうがよい」と表現するのが妥当であると考えよう。こうした人がいるかもしれないから¹⁵、念のため、穏当な反理論化傾向

『論考』の目的が、結晶のように純粋な「超＝秩序」(PU §97) を構成することであるとすれば、その著者にとって必要な事は、日常言語にありがちな濁りや不確かさを伴わないような仕方でも秩序を構成することである。それゆえその著者が使う言葉、すなわち「文、単語、推論、真理、経験などの概念」(PU §97) は、秩序と同様に純粋な言葉でなければならないことになる。そうした言葉は、われわれが日常的に使用している言葉とは一線を画す「超＝概念」(PU §97) だということになるだろう。

こうした「超＝概念」は、実際のところどのようなものであるのだろうか。「超＝概念」は、日常的に使用している言葉と一線を画す高級なものと考えられているが、そのような概念は、成立するのだろうか。基本的に、われわれが理解できる言葉とは、日常的に使っている言葉でしかない。もちろんわれわれは、普段とは違った言葉使いをすることがあり、また、これまで使われたことのない新しい言葉の使い方を編み出すことはありうる。それでも、新しい言葉の使い方は、あくまで慣習的な使い方を鑑みてなされるものであり、慣習的な使用からまったく独立に考えられるものではない。ところで「超＝概念」は、日常言語のもつ濁りや不確かさを決して伴ってはいないものであった。そうだとすれば、「超＝概念」は、われわれが理解できる日常的な言葉使いに決して依存してはいないものだということになり、われわれにとっては理解不可能なものということになる。これにより『論考』の著者は、理解不可能な言葉を使って秩序を構成することになってしまう。そうではなく、「超＝概念」が理解可能なものとして取り扱われるとすれば、それは表向きには決別したはずの日常的な言葉使いと関係をもっていなければならなくなる。つまり「超＝概念」は、日常言語のような濁りや不確かさをもたないとされている一方、日常言語から完全に独立したものとして考えられるものではありえない。そのような概念が哲学者の思惑通りに十分措定されるかどうかは疑わしく、そうした概念によって構成される秩序がどの程度意味をもつのかも同様に疑わしい。世界のア・プリオリな秩序という想定は、こうした困難をももたらすのである。

¹⁵ こうした人は、かなり慎重な態度をとっていると言えるが、その一方で、理論化の奇妙さをそれほど奇妙だと感じていない可能性もある。そうした人に対して、ラディカルな反理論化のテーゼがどれほど説得的であるかどうかは、議論の余地がある。もしこのことを議論するとすれば、『探究』で想定される治療対象者と、こうした人の差異という形で論じるとい

のテーゼに補足を加えて、ラディカルな反理論化のテーゼを提示してみよう。すなわち、穏当なテーゼが、理論化がなされてしまった場合の弊害も含意すると考えるのである。するとラディカルな反理論化テーゼは、「理論化が行われた場合、かくかくの弊害が生じることがほとんど不可避なため、理論を立ててはならない」という形式をとることができる。この場合、かくかくの弊害とは、どのようなものでありうるだろうか。

理論化の弊害は、次のようなものが考えられる。理論を立てる人にとっての弊害として考えたとき、その人にとっては、はじめから「このようなものがあるはずだ」という先入見によって言語使用を見るという弊害が生じうる。つまり、哲学者が自分の提示したい理論によく合致する言語使用だけ（例えば、固有名詞と指示対象が対応する場合）を極度に強調したり、自分の提示したい理論に合致する言語使用を中心に、あまり合致しない言語使用を編成しようとした（あまり合致しない言語使用を、自分が本質的と考える言語使用の変形や省略と見なす）、あるいは、自分の提示したい理論に合致しない言語使用（理論に組み込みにくい、叫びや挨拶などの言語使用）を無視したり、合致しない言語使用のあり方は重要ではないと独断的に決めつけたりしてしまうことがそれにあたる。こうした先入見は言語の多様性を容易に見失わせてしまう。さらに、哲学者に、自分の理論にあわせてある言語使用を本質的だとか、非本質的だとか決めつける権利があると考えることも疑わしい。また理論化を試みる本人にとってだけでなく、哲学者の理論を他人から聞いたり本で読んだりして知った人にとっても、理論が先入見としてはたらくという弊害を引き起こすことは、容易に想像される。

以上のように予見される弊害からして、ラディカルな反理論化のテーゼは、「理論化が行われた場合、理論を立てた本人が先入見によって言語使用を見てしまうだけでなく、理論を知った他人にとっても同様の弊害が生じることがほとんど不可避なため、理論を立ててはならない」となる。

考察をまとめよう。『探究』109節において「どんな理論も立ててはならない」と強く助言される理由は、その「理論」が説明もどき・理論もどきを意味する場合、それらが、使い道のない仮想的存在物を立てること、実際の言語使用を問題にしてはいないこと、過度で特殊な一般化を辞さないことを伴うからであり、こうした傾向の帰結として、言語使用の多様性を見失わせるという弊害を

う方法がある。

引き起こすことを免れないからである。

7 結語

本稿の目的は、ハッカーの立場——『探究』を体系的に理論化することが正当であるとする立場を検討する一つの判断材料として、109 節の「理論」の射程を、『探究』の治療のプログラム全体の整合性から最適な形で提示し、明確化することにあつた。そのために、『探究』109 節における「理論」の射程を、自然科学と混同された理論から理論もどきへと拡張した。理論もどきは、『断片』443-444 節にみられるように、理論の見かけをしておらず現実の言語使用を問題にしていないという特徴、そして、ニッチの活動においてのみ特殊な意義があると考えられるという特徴があつた。そしてこうした理論もどきの特徴は、『探究』で取り上げられる『論考』の思想にも合致する。こうした「理論」を理論もどきとしてとらえる試みを通じて明らかになった理論化の奇妙さ（使い道のない仮想的存在物を立てること、実際の言語使用を問題にしてはいないこと、過度で特殊な一般化を辞さないことを伴うからであり、こうした傾向の帰結として、言語使用の多様性を見失わせるという弊害を引き起こすことを免れないこと）は、ハッカーの解釈が正しいかどうかを考える一つの判断材料となつただろう。ハッカーの言う「体系的哲学」（1972 p. 140）が理論もどきとは明確に異なるとすればハッカーの解釈に正当性が認められようが、理論もどきの要素を一定程度含んでいるとすれば、ハッカーの解釈の正しさは疑問にさらされることとなる。このことを考察するのは、今後の課題である。

もう一つの今後の課題は、『探究』に含まれる文法的考察が、ウィトゲンシュタイン自身が避けようとした理論もどきに陥ってしまっていないか、という問題を検討することである。現時点でこの問題について言えることは、問いに否定的に答えることは、それほど簡単ではないということである。というのも、文法的考察は、理論もどきの特徴のうち、現実の言語使用を問題にしていないという点については当てはまらなくとも、ニッチの活動においてのみ意義があるという特徴については、これまで検討した例と同様ではないとしても、多少当てはまる部分があるからである。

参考文献

一次文献

- NT: *Notebooks 1914-1916*, University of Chicago Press, 2nd ed., 1979. (邦訳：奥 雅博、「草稿 1914-1916」、『ウィトゲンシュタイン全集 1』、大修館書店、1975 年、pp. 121-357)
- PU: *Philosophische Untersuchungen = Philosophical investigations*, Rev. 4th ed., Blackwell, 2009. (邦訳：丘沢 静也、『哲学探究』、岩波書店、2013 年)
- TLP: *Tractatus logico-philosophicus*, Suhrkamp, 2011. (邦訳：野矢 茂樹、『論理哲学論考』、岩波書店、2003 年)
- VB: "Vermischte Bemerkungen", *Über Gewißheit*, Suhrkamp, 2011, pp. 445-575. (邦訳：丘沢静也、『反哲学的断章：文化と価値』、青土社、1999 年)
- Z: "Zettel", *Über Gewißheit*, Suhrkamp, 2011, pp. 259-443. (邦訳：菅 豊彦、「断片」、『ウィトゲンシュタイン全集 9』、大修館書店、1975 年、pp. 171-394)

二次文献

- Baker, G. (2006), *Wittgenstein's Method: Neglected Aspects: Essays on Wittgenstein*, Blackwell.
- Baker, G. and Hacker, P. (1980), *Wittgenstein: Understanding and Meaning*, Blackwell.
- Bouveresse, J. (1991), *Philosophie, mythologie et pseudo-science: Wittgenstein lecture de Freud*, Éditions de l'éclat. (邦訳：中川 雄一、『ウィトゲンシュタインからフロイトへ—哲学・神話・疑似科学』、国文社、1997 年)
- Fischer, E. (2011), *Philosophical Delusion and Its Therapy: Outline of a Philosophical Revolution*, Routledge.
- Hacker, P.M.S. (1975, c1972), *Insight and Illusion*, Oxford University Press. (邦訳：米澤 克夫、『洞察と幻想』、八千代出版、1981 年)
- . (1997, c1986), *Insight and Illusion*, revised and corrected 1989 edition, Oxford University Press.
- . (2004), "Turning the Examination Around: the Recantation of a Metaphysician", *Wittgenstein at Work: Method in the Philosophical Investigations*, edited by Ammereller, E. and Fischer, E., Routledge, pp. 3-21.

- Kuusela, O. (2008), *The Struggle Against Dogmatism: Wittgenstein and the Concept of Philosophy*, Harvard University Press.
- McGinn, M. (2013), *The Routledge Guidebook to Wittgenstein's Philosophical Investigations*, Routledge.
- Morris, K. (2007), "Wittgenstein's Method: Ridding People of Philosophical Prejudices", *Wittgenstein and His Interpreters: Essays in Memory of Gordon Baker*, edited by Kahane, G., Kanterian, E. and Kuusela, O., Blackwell, pp. 66-87.
- Mulhall, S. (2004), "Philosophy's Hidden Essence: PI 89-133", *Wittgenstein at Work: Method in the Philosophical Investigations*, edited by Ammereller, E. and Fischer, E., Routledge, pp. 63-85.
- 大谷 弘 (2010)、「ウィトゲンシュタインの哲学的方法」、『哲学雑誌』125 巻 797 号、pp. 183-202。

(まきの さおり / 千葉大学大学院人文社会科学研究所 博士後期課程)